

K-624

山形県長井市埋蔵文化財調査報告書第14集

市内遺跡発掘調査報告書(5)

ちょうじょはら
長者原遺跡の調査

おとこがれいせきのとうさ
小影遺跡の調査

おおやしき
大屋敷遺跡の調査

とうのうえ
塔の上遺跡の調査

かわいいやま
河井山Ⅱ遺跡の調査 他

1997年

長井市教育委員会

市内遺跡発掘調査報告書(5)

長者原遺跡の調査

小影遺跡の調査

大屋敷遺跡の調査

塔の上遺跡の調査

河井山Ⅱ遺跡の調査 他

平成9年3月

長井市教育委員会

序

この報告書は、平成8年度に国庫補助を得て実施した市内遺跡発掘調査の結果をまとめあげたものです。

今年度の調査件数は14件と他の自治体に比較すると多い方ではありませんが、内訳をみると開発に係る調査要因が8割強を占めています。10数年来行ってきた分布調査と、行政機関内で開発と遺跡保護の調整に理解が示された数字と受けとめております。

また、民間開発の問い合わせも多く寄せられています。現在のところ9年度調査依頼件数がすでに3件寄せられており、開発の内容が大規模な造成であるため、調整の結果いかんによっては大がかりな緊急発掘調査が予想されます。

開発と遺跡保護の調整を実施して7年目をむかえ、民間の方からの問い合わせも増え牛歩ではありますが遺跡保護も市民権を得つつあります。行政機構内部での調整を充実させ、近い将来には民間の方々にもよりいっそうの文化財保護の必要性をご理解いただき、互いに調整をとりながら進めていく所存であります。

最後になりましたが、このたびの調査にご協力いただきました関係各位ならびに悪天候にもかかわらず調査に参加下さいました地元の方々に感謝申し上げるとともに、本書が埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いに存じます。

平成9年3月

長井市教育委員会

教育長 奥山晃二

例 言

1 本報告書は、長井市教育委員会が国庫補助を受けて実施した平成8年度以降開発事業との調整ならびに遺跡台帳整備に関する市内遺跡発掘調査報告書である。

2 事業期間は平成8年4月1日から平成9年3月31日までである。

3 調査体制は次のとおりである。

調査員 岩崎義信（長井市教育委員会文化課主査）

調査員 神尾昭利（長井市教育委員会文化課主任）

調査参加者 青木藤一	安部国藏	小笠原誠一	金田寿栄	菅万弥
桑原甚一	古口名兵衛	古口益栄	小関小市	小関春夫
小関政雄	佐藤勇	佐藤賢一	佐藤伸一郎	渋谷耕一
渋谷実	鈴木栄一	鈴木永一郎	鈴木浩	鈴木幹朗
鈴木吉巳	平金次	平周市	高橋清一	高橋辰巳
孫田邦夫	孫田晋助	孫田八郎	新野茂	平田照雄
布施外男	松木孝松	若狭二男		

事務局長 渋谷源一郎（長井市教育委員会文化課長）

事務局長補佐 村上和雄（長井市教育委員会文化課補佐）

事務局員 岩崎義信（長井市教育委員会文化課主査）

事務局員 神尾昭利（長井市教育委員会文化課主任）

事務局員 三浦亜子（長井市教育委員会文化課）

4 本調査にあたっては、次の方々のご指導・ご協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。

文化庁、山形県教育庁文化財課、（財）山形県埋蔵文化財センター、西置賜行政組合、西根史談会、森地区、大屋敷・館野地区、河井地区、豊田地区文化振興会、長井市商工観光課
・下水道課・建設課、長井市古代の丘資料館

また、河井山II遺跡の現地調査にあたり、岡村道雄氏よりご指導を賜った。記して感謝申し上げます。

5 挿図・付図の縮尺はスケールで示した。遺物の写真的スケールは5cmを示す。

6 本書の編集・執筆は岩崎義信が担当し、挿図・図版の作成は三浦亜子の補助を得た。

目 次

I 調査に至るまで	1
1 調査の目的	1
2 調査の方法	1
3 調査の経過	1
II 開発事業に係る発掘調査	4
1. 日の出町遺跡	4
2. 南台遺跡	5
3. 塔様遺跡	6
4. 北向地区	7
5. 小影遺跡	8
6. 荒屋敷遺跡	12
7. 松山遺跡	13
8. 長者原遺跡	15
9. 長者屋敷遺跡	19
10. 長者原B遺跡	20
11. 遠藤屋敷遺跡	21
12. 大屋敷遺跡	24
III 遺跡台帳整備に係る発掘調査	25
13. 塔の上遺跡	25
14. 河井山Ⅱ遺跡	29
報告書抄録	35

挿 図 目 次

第1図 調査箇所位置図	3
第2図 日の出町遺跡概要図	4
第3図 南台遺跡概要図	5

第4図 塔様遺跡概要図	6
第5図 北向地区概要図	7
第6図 小影遺跡概要図・荒屋敷遺跡	10・11
第7図 松山遺跡概要図	13
第8図 長者原遺跡・長者屋敷遺跡・長者原B遺跡概要図	16
第9図 遠藤屋敷遺跡・大屋敷遺跡概要図	22・23
第10図 塔の上遺跡概要図	26・27
第11図 河井山Ⅱ遺跡概要図	30
第12図 河井山Ⅱ遺跡調査区概要図	31
第13図 河井山Ⅱ遺跡調査区土層セクション図	32
第14図 河井山Ⅱ遺跡出土状況	33

図 版 目 次

図版1 小影遺跡	8
図版2 小影遺跡	9
図版3 荒屋敷遺跡	12
図版4 松山遺跡	14
図版5 長者原遺跡近景	15
図版6 長者原遺跡	17
図版7 長者原遺跡	18
図版8 長者屋敷遺跡	19
図版9 長者屋敷遺跡・長者原B遺跡	20
図版10 遠藤屋敷遺跡	21
図版11 大屋敷遺跡	24
図版12 塔の上遺跡	25
図版13 塔の上遺跡	28
図版14 河井山Ⅱ遺跡出土遺物	34

付表1 埋蔵文化財ヒアリングおよび遺跡台帳整備に係る調査一覧表	2
付表2 調査工程表	2

I 調査に至るまで

1. 調査の目的

本市では昭和57年から行った遺跡詳細分布調査を発端にし、市内全域にわたる分布調査を実施してきたところ約200箇所の遺跡を把握した。しかし近年時代の要求に伴い、遺跡が存在する地域にも開発がおよぶようになってきた。そのため開発事業と調整を図り、事前に遺跡の保護にあたることを目的とした調査である。

また、周知の遺跡は表面踏査で確認したものがほとんどであるため、遺跡の範囲・性格・年代等を明らかにするために試掘調査を行い、遺跡台帳の整備にあたった。

2. 調査の方法

(1) 現地調査

遺跡として登録されていない地域でも、事業実施区域が広範囲におよぶ場合は現地調査を実施し遺跡の有無を確認し、開発事業と遺跡保護の調整にあたった。

(2) 試掘調査

周知の遺跡が事業実施区域に含まれる場合や、周知の遺跡周辺に開発がおよぶ場合には坪掘りやトレンチ掘りを行い、遺構・遺物の広がりを確認し、さらに遺構検出面までの深さを把握し開発事業と遺跡保護の調整を図った。

また、遺跡台帳を整備する目的から、これまで表面踏査から推定した遺跡について坪掘りやトレンチ掘りを行い、遺跡内容の補筆にあたった。

(3) 測量調査

中世の館跡など現況に遺構の形態が現れている遺跡を対象に測量調査を行い、開発事業計画と遺跡保護の調整にあたると同時に、遺跡台帳の整備の目的から測量調査を行い遺跡内容の補筆にあたった。

3. 調査の経過

長井市教育委員会ではこれまで実施してきた分布調査から遺跡地図を作成した。この地図を開発を担当する関係機関に配布し、今後計画されている開発事業にさきがけて埋蔵文化財に係るヒアリングを実施している。その結果を受けて、開発事業との調整を図るために必要に応じ上記の調査を実施した。

なお、ヒアリングと調査の内訳は次のとおりであり、現地調査の工程は次のとおりである。

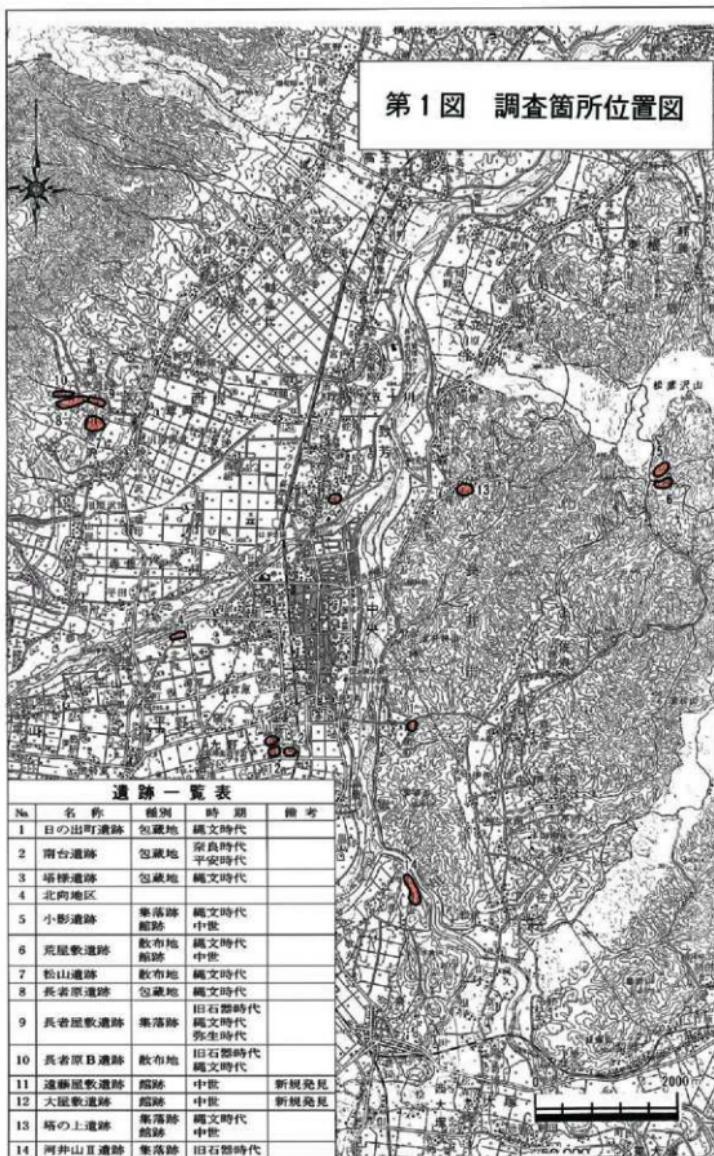
埋蔵文化財ヒアリングおよび
遺跡台帳整備に係る調査一覧表

事業種別	遺跡名	調査区分	備考
大規模造成事業に係るもの	北向地区	試掘調査	
	日の出町遺跡	試掘調査	民間開発
	小影遺跡	試掘調査	縄張図作成
	荒屋敷遺跡	試掘調査	縄張図作成
道路工事に係るもの	松山遺跡	試掘調査	
	長者原遺跡	試掘調査	
	長者原B遺跡	試掘調査	
	塔様遺跡	試掘調査	
	遠藤屋敷遺跡	試掘調査	縄張図作成
	大屋敷遺跡	表面踏査	縄張図作成
その他の開発事業に係るもの	南台遺跡	試掘調査	民間開発
遺跡台帳整備に係るもの	塔の上遺跡	試掘調査	縄張図作成
	河井山II遺跡	試掘調査	地形図測量

調査工程表

日程 内容	平成8年												平成9年			
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月				
試掘調査	■	■						■■■								
縄張図作成										■						
報告書作成									■■■■■							

第1図 調査箇所位置図



第1図 調査箇所位置図

II 開発事業に係る発掘調査

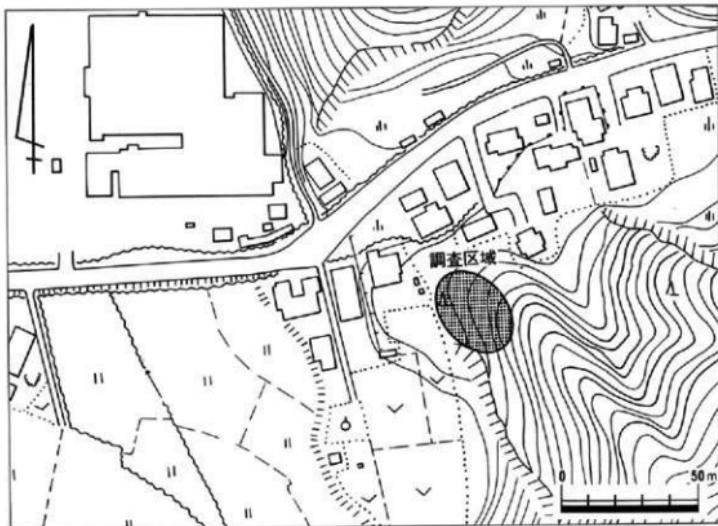
1. 日の出町遺跡

市街地の東部、最上川右岸の河岸段丘上に位置し昭和63年に確認された遺跡である。聞き取り調査によると昭和30年代にぶどう畑開墾の際、一個体の土器が出土している。

このたびの調査は、民間開発の林地開発（土砂採取）に伴う調査である。開発予定区域を踏査したところ遺跡範囲に含まれる箇所は、以前行われた土砂採取で削平を受け遺構・遺物、包含層は確認されなかった。また、遺跡範囲の東に隣接する丘陵部の平坦地も試掘調査を実施した。すなわち、丘陵の裾野に沿って $1 \times 1 \text{ m}$ のテストピットを 10 m 間隔に6箇所設定し、地山層まで掘り下げ遺構・遺物の検出にあたった。概ね地山層までの堆積土は厚く搅乱や客土層が検出され、遺構・遺物は確認されなかった。したがって開発事業が本遺跡におよぼす影響はないものと考えられる。



TP 4 土層断面図



第2図 日の出町遺跡概要図

2. 南台遺跡

山形鉄道フラワー長井線の西側に位置する遺跡である。一帯は旧河川によって形成された河岸段丘で低地との比高差1~2mを測る。本遺跡出土と伝えられる須恵器が保管されているが出土地点や採取状況等詳細は明かでない。須恵器は数点の杯が接合した状態にあることから窯跡の存在も予測されるが、遺跡の性格や範囲は将来の調査に委ねることとする。

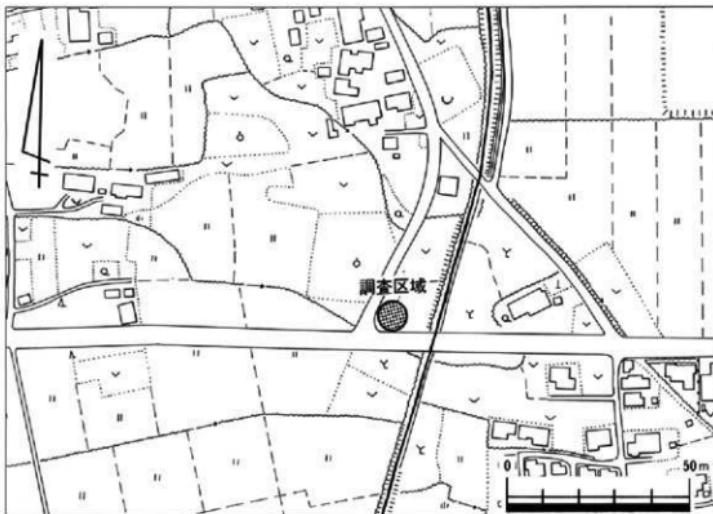
このたびの調査は遺跡範囲に鉄塔建設が計画されたため、遺跡との関わりについて試掘調査を行い事前に開発事業と調整を計る目的で実施した。

開発予定範囲に1×1mのテストピットを任意に4箇所設定し、地山層まで掘り下げ遺構・遺物の検出にあたった。地山層までの堆積土は40~80cmとさまざまであり、一部搅乱も見られるが安定した土層の堆積が認められるものの、遺構・遺物は検出されなかった。

したがって、開発事業の計画範囲には遺跡の範囲がおよんでいないものと推定される。



TP 3 土層断面



第3図 南台遺跡概要図

3. 塔様遺跡

最上川と置賜野川によって形成された河岸段丘上に位置し、平成元年度の分布調査で発見された遺跡である。石器が採集されていたため縄文時代の遺跡に含まれるが、弁慶にまつわる五層の石塔も建っており、鎌倉時代の遺跡の存在も予測される。

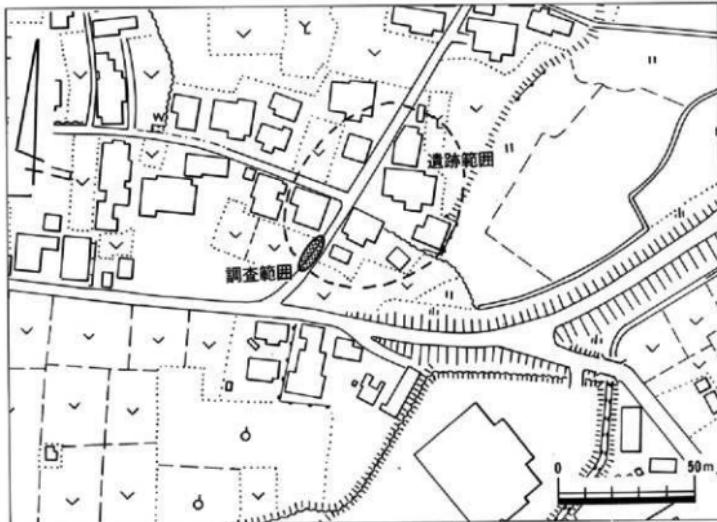
このたびの調査は市道改良工事が計画されたため、遺跡との関わりについて試掘調査を行い事前に開発事業と調整を計る目的で実施した。開発予定範囲に $1 \times 10m$ のトレンチを設定し、地山層まで掘り下げ構造・遺物の検出にあたったが、検出されなかった。したがって、開発事業が本遺跡におよぼす影響はないものと考えられる。



遺跡近景



トレンチ土層断面



第4図 塔様遺跡概要図

4. 北向地区

置賜野川の右岸に位置する地域である。このたび西置賜行政事務組合の消防庁舎建設事業が計画されたため、遺跡の有無を確認するため事前に試掘調査を行い開発事業との調整にあたった。

造成予定範囲に 1×1 m のテストピットを 30m 間隔に 13箇所設定し地山層まで掘り下げ遺構遺物の検出にあたった。また、これと並行して周辺区域の踏査を行った。

その結果、開発区域ならびに周辺区域から遺構・遺物は検出されなかった。

したがって開発事業と遺跡保護の調整は必要ないと考えられる。



調査区近景



TP 12 土層断面



第5図 北向地区概要図

5. 小影遺跡

市街地の北東部に位置する大石地区は、戰国期の城館遺跡が多く点在しており、古くから山間地の交通の要所として重要視された地域である。本遺跡は昭和62年の分布調査で発見され、縄文土器や石器が多數採集された。このたび当地域に大規模造成が計画されたため、開発事業と遺跡保護の調整を図る目的で分布調査を実施した。

開発計画範囲周辺を踏査し遺跡有無の確認にあたると同時に、周知の遺跡範囲に 1×1 m のテストピットを10~20 m 間隔に31箇所設定し地山層まで掘り下げ遺構・遺物の検出にあたった。

その結果、周知遺跡北側の丘陵に段々畠状の平坦地を確認したため縄張図の作成に当たった。試掘調査では TP 10・19・21・22・26・27・29・31から土器や石器が出土した。

以上のことから、TP 4・10・15から剥片や石籠の出土があったものの、東側の沢に近くにしたがって客土が厚く堆積し、遺物の出土は客土層からのものであり遺構や包含層は確認されなかった。したがって遺跡範囲の南側は昭和40年代の基盤整備事業で破壊を受けたと推定され、開発工事にあたっては慎重工事の必要がある。また、TP 19~31のテストピット設定区域では前に水田として使用したため、北西側の丘陵沿いでは地山層までの堆積がいくぶん浅かったものの、遺物の出土量も多く包含層も安定して TP 22・26では遺構が TP 19・21・22・26・27・31から遺物が出土し、縄文時代の集落跡と推定される。さらに、丘陵地帯の段々畠状の平坦地は曲輪とよばれる施設で戦国期の山城跡と考えられるところから、開発計画に遺跡範囲が含まれる場合は充分な協議が必要である。



遺跡近影



TP 22 土層断面

①	耕 作 土 20cm
②	暗灰茶褐色土 15cm
③	暗灰褐色土 (遺物包含層) 10cm
④	褐色砂質土 5cm

TP 22 土層柱状図



曲 輪

図版1 小影遺跡

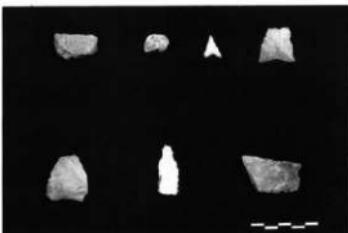
遺構・遺物について

城館遺跡に伴う遺構は丘陵沿いに見られる事から、テストピット設定区域を含めた丘陵全域におよんでいたものと推測される。遺構は丘陵の尾根上に築かれるものと裾野部分の比較的平坦地に築かれるふたつのタイプに分けることができる。尾根上に築かれた遺構は段差をもつ曲輪で長軸12m、平坦地からの比高差2m、大きい曲輪は長軸30m、平坦地からの比高差3mを測る。現状は杉林となっているが曲輪の輪郭も明瞭に確認され遺存状況は良好である。平坦地の遺構は丘陵と沢の間に築かれ130~60cmの比高差をもち段々畠状の形状を呈する。

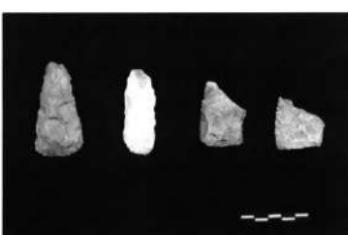
出土遺物は土器と石器（図版2）である。土器片は体部の小破片で文様の明かなものは少ないが胎土に纖維の混入が認められ、縄文早期末から前期初頭の所産である。石器は石鎌2点・石匙1点・石籠3点・削器2点が出土した。大型の石鎌は基部に浅い抉りをもち先端部が欠損するものの、器の中央部に達する幅広の押圧剥離が見られる。小型の石鎌は正三角形の形状を呈し、基部に深い抉りをもち細かい押圧剥離が見られる。石籠は撥形で断面が凸レンズ状を呈し両刃になると、平面形が棒状で断面が肉厚の凸レンズ状を呈し両刃になる二種類の形態に分けられる。削器は横長の剥片を素材とし、一端に刃部加工を施したものである。打製石器の石材はすべて頁岩である。他に拳大の大きさで片面にそれぞれ1~2個の凹を有する花崗岩を素材とした凹石と、断面が三角形を呈し長軸の稜線に磨痕が認められる磨石が出土している。



曲輪



出土遺物



出土遺物



出土遺物

図版2 小形遺跡



第6図 小影遺跡・克屋敷遺跡概要図

6. 荒屋敷遺跡

小影遺跡の南側に位置する。昭和62年の分布調査で発見され、当時は石礫や剝片が採集され縄文時代の遺跡として登録された。このたび、当地域に大規模造成が計画されたため、開発事業と遺跡保護の調整を図る目的で分布調査を実施した。

開発計画範囲周辺を踏査し、遺跡有無の確認にあたると同時に、前回の分布調査で遺物を探集した範囲に $1 \times 1\text{m}$ のテストピットを任意に4箇所設定し地山層まで掘り下げ遺構・遺物の検出にあたった。

その結果、テストピットからは遺構・遺物の検出はなく、部分的に攪乱や客土層が観察された。しかし道路沿いに見られる尾根を削平した段々畠状の平場や、尾根を垂直に断ち切る形状の堀跡が確認されたため縄張図の作成にあたった。平場は城館遺跡の曲輪で尾根に沿って東西方向に四段築かれる。西端の曲輪は隅丸方形を呈し、北西隅に張り出しをもち平坦地からの比高差は約4mに達する。曲輪中央部には幅約2m長さ60m深さ1mの堀切を配し、その東側には方形の曲輪が築かれ、東端の曲輪の背面は4mにおよぶ崖面となる。南側には前述した遺構より2~3m低い緩斜面に曲輪が築かれる。

以上のことから、本遺跡は当初縄文時代の集落跡であったものが、戦国期にいたり城館遺跡の構築のため部分的に削平を受けたものと推測される。テストピットの土層断面において道路側の地山層までの深さが浅いのに対し、TP32・33で堆積土が厚く地山土の混じる客土が観察されることがあげられる。

したがって、開発計画に遺跡範囲が含まれる場合は充分な協議が必要である。



遺跡近影



TP34 土層断面



堀 切



曲 輪

図版3 荒屋敷遺跡

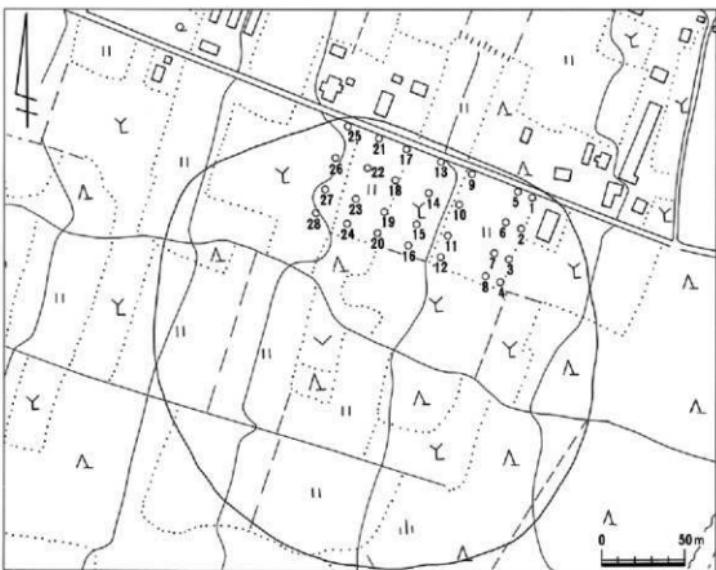
7. 松山遺跡

西山山ろくは古くから遺跡が点在する場所として知られ、開墾や掘削の折り各地から遺物の出土が伝えられている。本遺跡は昭和57年の分布調査で発見され、桑畑一帯から多数の遺物が採集された。また、北には旧石器・縄文・弥生時代の長者屋敷遺跡と旧石器時代の長者原B遺跡、東には縄文中期の中里遺跡、西には縄文晩期の長者原遺跡があり当地域は遺跡の密集地帯である。

このたび、当遺跡の北辺を通る市道の改良工事が計画されたため、開発事業と遺跡保護の調整を図る目的で分布調査を実施した。調査区域は開発事業の関わりから遺跡の北側とし、10~20m間隔に1×1mのテストピットを28箇所設定し、地山層まで掘り下げ遺構・遺物の検出にあたった。

その結果、道路沿いのテストピットでは地山層までの堆積土が厚く、人頭大から拳大の花崗岩礫が多量に検出され地山の土質がブロック状に含まれるのに対し、TP 3~27列とTP 2~26列のテストピットでは地山層までの堆積土が浅い。また、いずれのテストピットからも遺構・遺物が検出されなかったことから、昭和50年代の基盤整備事業で当初敵高地だった地形が、削平されたのち道路側に盛り土され、現況の地形になったものと推定され、遺跡範囲は南側にずれる可能性がある。

したがって、道路改良事業が本遺跡におよぼす影響はないものと考えられる。



第7図 松山遺跡概要図



遺跡近影



TP 5 土層断面



調査風景



- ①耕作土 20cm
- ②暗茶褐色土 35cm
(礫を多く含む)
- ③暗茶褐色土 20cm
- ④黒褐色土 20cm
- ⑤褐色粘質土 5cm

TP 5 土層柱状図

図版4 松山遺跡

8. 長者原遺跡

西山山ろくの遺跡で、長者屋敷遺跡の西に隣接する。昭和57年の分布調査で発見され縄文時代の土器や石器が採集されたほか、聞き取り調査によると根菜類の栽培時に弥生土器も出土している。

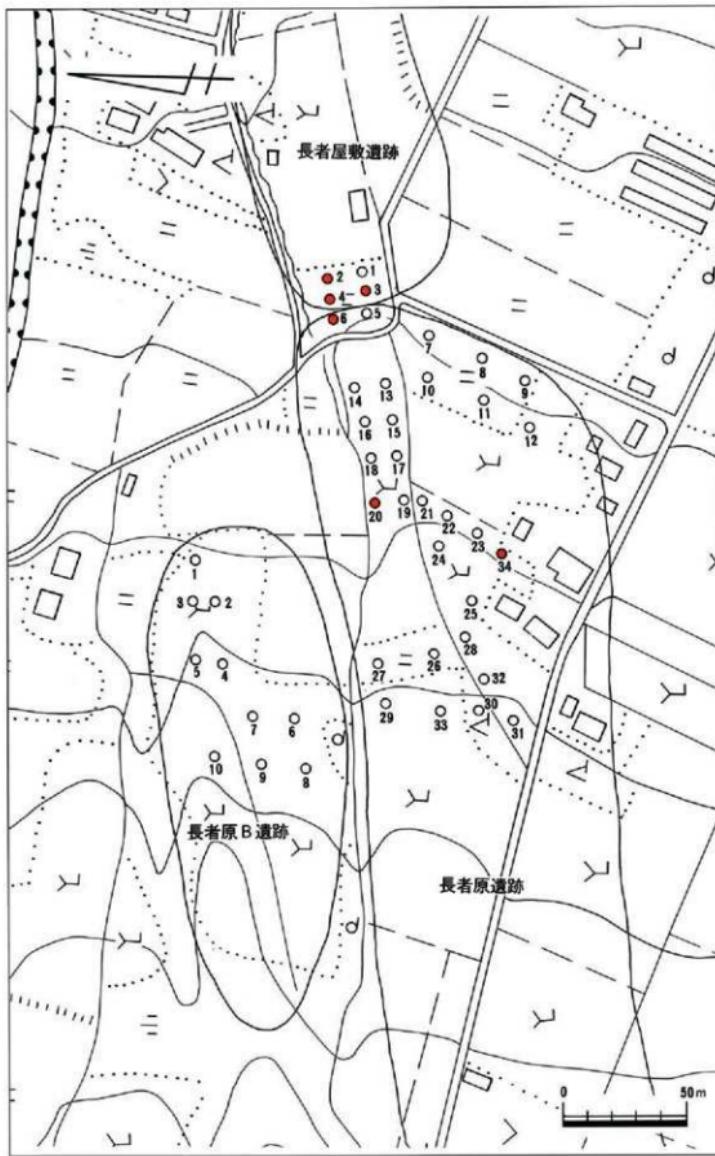
このたび、当遺跡の東端を通る市道の改良工事が計画されたため、開発事業と遺跡保護の調整を図る目的で分布調査を実施した。調査区域は開発事業の関わりから遺跡の東側とし、10～20m間隔に 1×1 m のテストピットを30箇所設定し、地山層まで掘り下げ遺構・遺物の検出にあたった。

その結果、TP 6・20・34・35から遺物が出土し、さらにTP 34から人頭大の礎が密集して出土したため 2×2 m のトレーナーに拡張したところ集石が検出された。礎の埋っている範囲はトレーナーをはるかにうまわり、ボーリングステッキで範囲を推定したところ 10×20 m のにおよぶ。

以上のことから、調査で遺構・遺物が検出された箇所は、平面で見るかぎり散発的でまとまりを感じさせないが、現在の地目や耕作状況が遺跡範囲の目安となる。すなわち、TP 7～12は水田で搅乱や客土が土層断面で観察され、TP 13～18・25～30は根菜類の栽培が行われた畑で地山層まで耕作がおよぶが、他は層序も安定している。したがって本遺跡は縄文中期末と晚期中葉の集落跡と推定され、開発行為が遺跡におよぶ場合は詳細な協議が必要である。



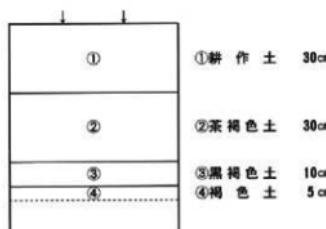
図版5 長者原遺跡近景



第8図 長者原遺跡・長者屋敷遺跡・長者原B遺跡概要図



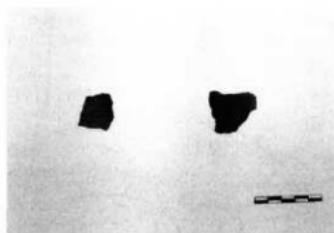
TP 24土層断面



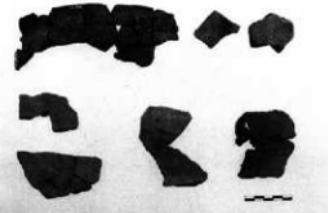
TP 24土層柱状図



出土遺物



出土遺物



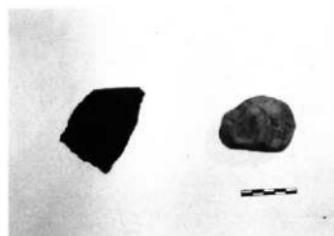
出土遺物



出土遺物



出土遺物



出土遺物

図版 6 長者原遺跡



集石検出状況



集石検出状況

図版7 長者原遺跡

9. 長者屋敷遺跡

本遺跡は昭和52～56年にかけて発掘調査が行われ、旧石器・縄文・弥生時代の遺物・遺構が検出され、なかでも縄文中期と晩期の大規模な集落跡が見つかった。このたび遺跡の西端部と長者原遺跡の東側に道路改良工事が計画されたため、開発事業と遺跡保護の調整を図る目的で分布調査を実施した。

遺跡の西端部の調査可能な区域に、5～20m間隔に1×1mのテストピットを第8図のとおり設定し、地山層まで掘り下げ遺構・遺物の検出にあたった。

その結果、遺跡は現在西側の畑を残し公園として活用しているため、調査範囲は20×30mの限られた範囲であったが、ほとんどのテストピットから遺物・遺構が検出された。また、表面採集でも多数の土器や石器を採集した。

以上のことから、本調査区域も遺跡の存在が予想される。これまでの発掘調査から、本遺跡は西に開く馬蹄形の集落形態をとり、集落中央は集石やピット群が密集する。住居跡には2基の埋設土器を配置する複式炉をもち、複数の住居が重なり切合い関係にある。遺物は縄文前期初頭・中期・晩期の土器が出土するが、集落中心部の土器は大木9～10式土器と大洞C₂式土器が主体を占める。このたびの調査の遺物をみると、表採資料には晩期の土器が多く包含層の遺物は中期の土器が見受けられることから、縄文中期の遺跡の存在が予想される。したがって、当地域が開発計画に含まれる場合は充分な協議が必要である。

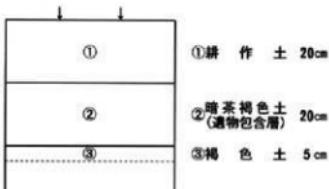


遺跡近影

図版8 長者屋敷遺跡



TP 2 土層断面



TP 2 土層柱状図



採集遺物



出土遺物

10. 長者原B遺跡

長者屋敷遺跡の西北に位置し、小河川で形成された段丘上にあり以前エンドスクレイバーが採集されており旧石器時代の遺跡として登録された。このたび遺跡の東側に道路改良工事が計画されたため、開発事業と遺跡保護の調整を図る目的で分布調査を実施した。

調査区一帯は畑地で、作物の収穫前であったため調査範囲は限られたが、以前遺物が採集された丘陵先端部を中心に 1×1 m のテストピットを 10箇所任意に設定し地山層まで掘り下げ遺構・遺物の検出にあたったが遺構・遺物は検出されなかった。しかし、旧石器時代の遺跡の性格を考慮すると、本遺跡に開発行為がおよぶ場合には再度詳細な調査が必要である。



遺跡近影



トレンチ土層断面

図版9 長者屋敷遺跡・長者原B遺跡

11. 遠藤屋敷遺跡

市街地の南西部、九野本地区に位置し、このたびの調査で明らかになった新規発見の遺跡である。以前から土塁や堀跡が残っており、明治8年の字切図にも遠藤屋敷の字名が見られる。このたび、市道改良工事が計画されたため、開発事業と遺跡保護の調整を図る目的で分布調査を実施した。

開発計画周辺地の踏査を明治8年の字切図を参考に遺構確認に当たると同時に、聞き取り調査から得た情報をもとに推定遺跡範囲に1×1mのテストピットを10~20m間隔に11箇所設定し地山層まで掘り下げ遺構・遺物の検出にあつた。

その結果、西側の水路に沿って幅5~15m長さ約45m高さ0.5~1mにわたり築高地が見られる。また、築高地の南側には終戦直後まで土手が残っていた。さらに土手を削り烟を造成するさいに石鎚が出土している。TP 3・4・10で遺構を確認したためTP 3・4をそれぞれ拡張し1×5m、1×2mのトレンチとし遺構面の検出にあつた。

以上のことから、遺物の出土はなかったもののTP 3・4・10で確認した遺構の覆土は溝跡特有の水底の泥が固まつたような腐敗臭を有する土質である。聞き取りによるとホップ烟に枕を設置するさい、遺構が確認された区域よりクリの実が多数出土しており、泥といっしょに堆積したものと考えられ、本遺構は堀跡と推測される。また、堀の範囲を確認するためボーリングステッキで土質調査を行ったところ、各所で堀跡の覆土と同様の土質が検出され、その範囲を結んだところ第9図の波線の範囲となった。

したがって、遠藤屋敷は土塁や堀が巡らされた城館遺跡であると同時に、石鎚の出土から周辺には石器時代の遺跡の存在が予想され開発事業にあつては充分な協議が必要である。



遺跡近影



土 塁



遺構検出状況

①	耕 作 土	20cm
②	茶褐色土	30cm
③	暗茶褐色土	10cm

土層柱状図

図版10 遠藤屋敷遺跡



第9図 遠藤屋敷遺跡・大屋敷遺跡概要図

12. 大屋敷遺跡

遠藤屋敷遺跡の南に位置し、このたびの調査で明らかになった新規発見の遺跡である。宅地の周辺には土壘や堀跡が残っており、明治8年の字切図にも大屋敷の字名が見られる。このたび、市道改良工事が計画されたため、開発事業と遺跡保護の調整を図る目的で分布調査を実施した。

開発計画周辺地の踏査を明治8年の字切図を参考にしながら遺構確認に当たると同時に、聞き取り調査から得た情報をもとに踏査を行い遺構の確認にあつた。

その結果、現況が宅地・水路であるため試掘調査を実施できなかったが、西側に幅約2mの水路が南北に流れ、中央の水路分岐部付近に高さ0.5~1mの敵高地を確認した。また明治8年の地籍図から、当地域の水路の位置は若干異なっているものの方に区画された地形、基盤整備事業による水路の縮小化、大屋敷の字名などから、当地域も土壘と堀を有する城館遺跡と推測される。遺跡の年代や館主など詳細は明かではないが限られた範囲に2件の城館遺跡が隣接するところに特徴がある。平地の館が狭い範囲に密集する事例は本市において成田・五十川両地区があり、本地域と距離的な隔たりはあるものの興味深いところである。

したがって、本遺跡に開発事業がおよぶ場合は充分な協議が必要である。



遺跡遠影



土 壁



堀 跡



堀 跡

図版II 大屋敷遺跡

III 遺跡台帳整備に係る発掘調査

13. 塔の上遺跡

最上川の支流、森ヶ沢の左岸に位置する。平成元年の調査で発見された遺跡で河床面からの比高差は約15mを測る高台となり、平坦地にはが畠地が広がり遺物の散布が見られる。地権者の小口さん宅には字名の由来となる石塔が伝わっている。下から方形・円筒形・角垂状の石が三層重なり、しかも成田地区の七層の石塔と草岡地区の五層の石塔が東西を結ぶ一直線上に位置するという。このたびは、遺跡台帳整備の目的から試掘調査を実施した。

遺物の散布が見られる調査可能な範囲に、 1×1 mのテストピットを10m間隔に27箇所設定し、地山層まで掘り下げ遺構・遺物の検出にあたった。また、聞き取り調査から台地南西部の丘陵には段々畠状の平坦地が確認されたため、縄張図の作成にあたった。

その結果、TP 1・5・6・7・9・10・12・18・22・から遺構を検出し、TP 1・3・8・11・27から遺物が出土した。遺構はTP 9がピットで他は土坑と思われる。遺構は暗茶褐色土に黒褐色土が落ち込んだものと、明茶褐色土と暗茶褐色土に黒褐色土が落ち込んだものに大きく分けられる。また、縄張図の作成にあたったところ丘陵には山頂を囲むように幅2m長さ10~40mにおよぶ帶曲輪が、さらに台地南を流れる沢沿いには7段の曲輪が確認された。

したがって、本遺跡は遺構・遺物から縄文時代・平安時代の集落跡と戦国時代の城館遺跡であることが判明した。



遺跡近影

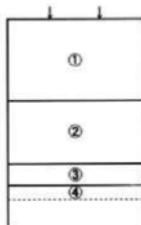
図版12 塔の上遺跡



第10図 塔の上道路概要図



1 トレンチ土層断面



1 トレンチ土層柱状図



塔曲輪



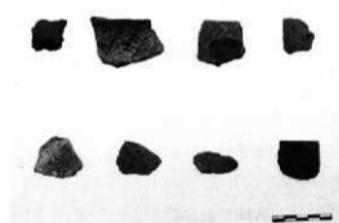
塔曲輪



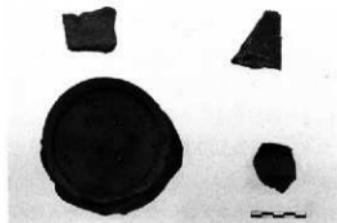
曲輪



曲輪



出土遺物



出土遺物

図版13 塔の上遺跡

14. 河井山Ⅱ遺跡

昨年度に引き続き河井山山頂部に位置する旧石器時代の河井山Ⅱ遺跡の範囲・性格等を明かにし、遺跡台帳整備を目的とした調査である。

今年度の調査は遺跡の性格を明らかにするため、遺物の密集区域をもとめて、昨年度の調査において遺物が出土した地点を中心に 1×1 mのテストピットを13箇所設定し、遺構・遺物の検出にあたった。すなわち、昨年度調査区域の南側に5~10m間にテスティットを、また北西側に 2×2 mを基準としたトレンチをそれぞれ任意に設定し調査にあたった。

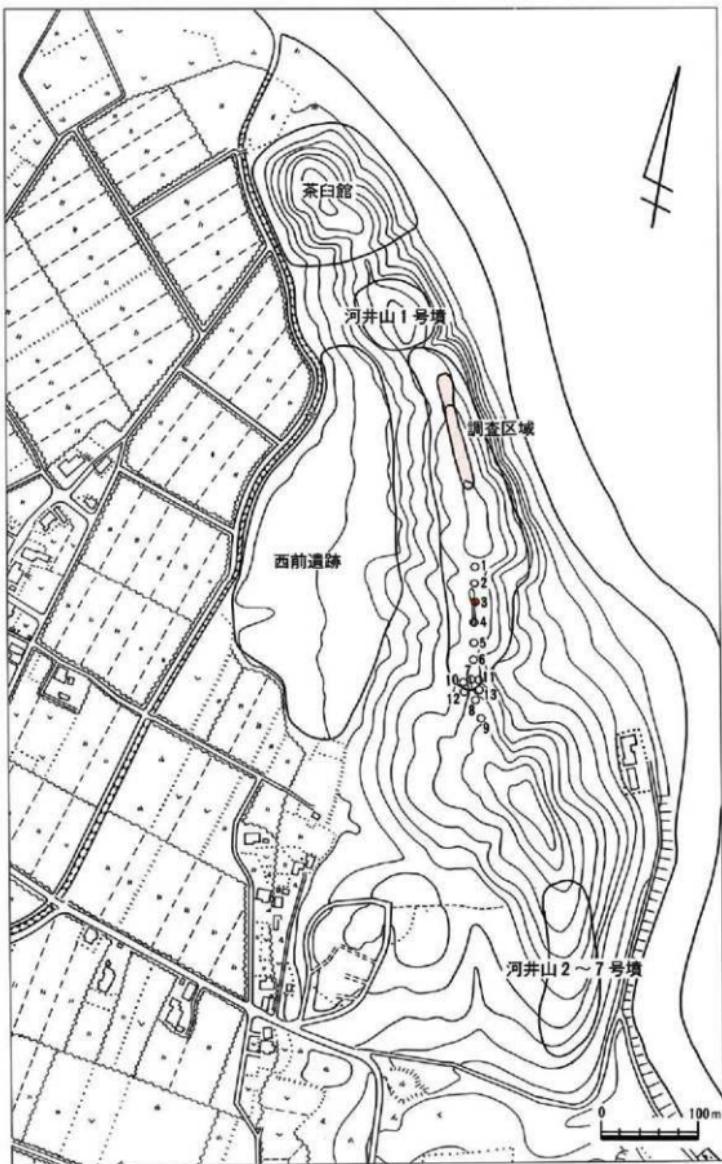
その結果、TP3から剝片が、またA調査区1・2トレント、B調査区1トレント、C調査区1トレントからそれぞれ遺物が出土した。

土層はC調査区2トレントを80cmほど深掘りを行い標準とした。①層は表土で黒褐色腐植土の下にパサパサした柔らかい暗灰褐色を含む土質である。②層は明灰褐色を呈し粘性があるがしまりが弱く柔らかい土質で径5~10mmの小礫を多く含む。昨年度調査のⅢ層暗褐色土に相当する。TP3とA調査区2トレント、B調査区1トレント、C調査区1トレントで本層の上位から中位にかけて遺物が出土した。③層は灰褐色を呈し粘性に富みしまりのある土質で径5~10mmの小礫を多く含む。昨年のⅢ層暗茶褐色土に相当する。A調査区1トレントから石刃が出土した。④層は褐色を呈しA調査区2トレント、C調査区1トレントで検出される土質である。⑤層は赤茶褐色土で粘性に富み砂粒を多く含みかたくしまった土質で昨年のⅣ層赤茶褐色土に相当する。⑥層は明橙褐色を呈し粘性に富みマンガン塊を多く含みかたくしまった土質である。A・B調査区の②・③層では多量の礫が検出された。大きさは径5~10mmの小礫混じりの土質に拳大の礫が多く出土し、川原石や熱を受けて変質したと思われる礫も含まれてゐる。A調査区2トレントにおいて礫の出土状況と層位の関わりを観察する目的から第14図を作成した。礫の検出は②・③層に集中しており遺物の出土も②・③層であることから、両者にはなんらかの関わりが想定される。

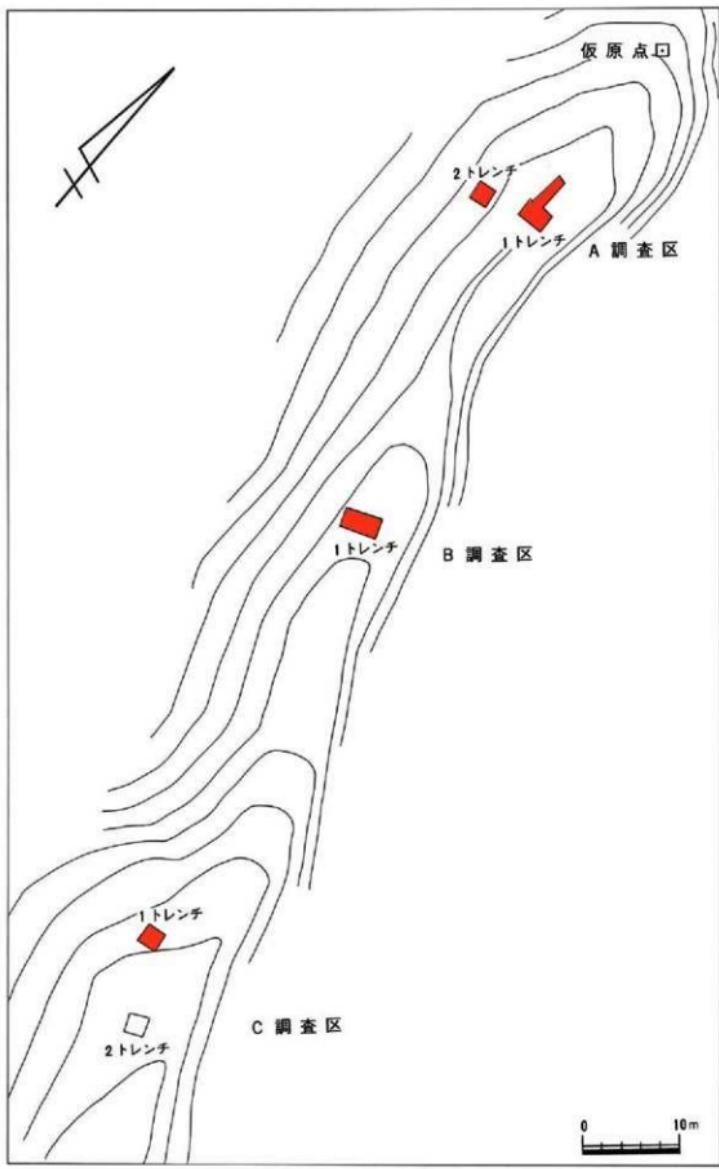
遺物はA調査区1トレントから石刃が、A調査区2トレント・B調査区1トレント・C調査区2トレントから剝片が出土した。石刃は頁岩を素材とし先端部を欠損するが、基部から先端にかけて2条の稜線をもつ。打面には調整が施され、背面には剥離痕がみられないことから一撃で打ち削られた石刃であろう。剝片類はいずれも頁岩を素材とし不定形であり、背面と腹面の両方に複数方向からの剥離痕が観察される。

以上のことから、本遺跡の遺物包含層は②・③層であることが確認され、検出した礫には熱を受けて変質したと思われるものも含まれ、集石の存在も予想される。また、石器には明らかに石刃技法を用いて生産された石刃があり、③層からの出土である。昨年度の調査で出土したナイフ形石器も同様の層から出土しており、③層を石刃技法を有する文化層としてとらえることができる。

遺物の出土が少ないので遺跡の性格なのかそれとも調査区域の設定に問題があるのか、また丘陵のどの部分に遺跡がおよんでいるか今後の課題である。

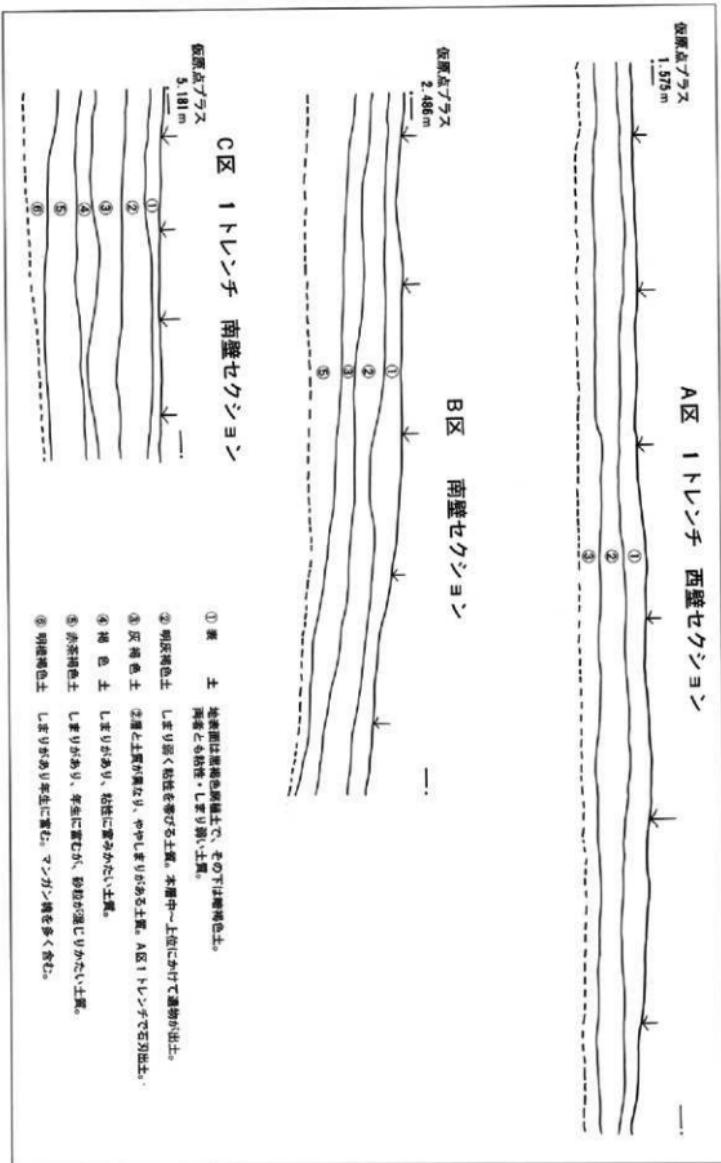


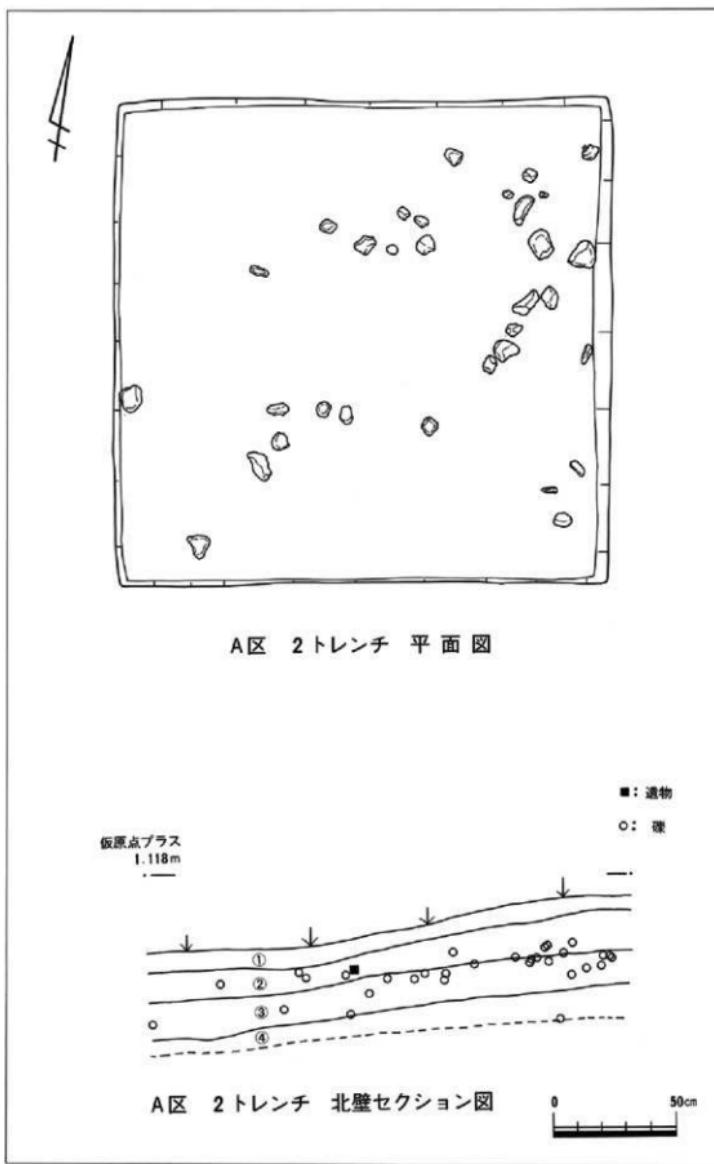
第11図 河井山II遺跡概要図



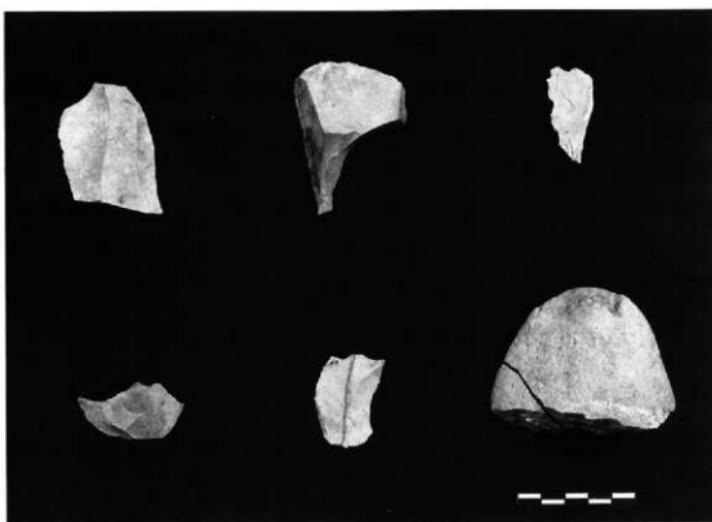
第12図 河井山II遺跡調査区概要図

図19 国立区土壤セクション図





第14図 河井山II遺跡発出土状況



图版14 河井山II遗址出土遗物

報告書抄録

ふりがな	しないいせきはくつちょうさはうこくしょ						
書名	市内遺跡発掘調査報告書						
副書名	長者原遺跡の調査、小影遺跡の調査、大屋敷遺跡の調査、塔の上遺跡の調査、河井山II遺跡の調査						
卷次							
シリーズ名	山形県長井市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第14集						
編著者名	岩崎義信						
編集機関	長井市教育委員会						
所在地	〒993 山形県長井市ままの上5番1号 TEL 0238-84-2111						
発行年月日	西暦1997年3月31日						

所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	測量番号 (測量年月)					
長者原	山形県長井市草岡字長者原	6209	95	38度07分53秒	140度00分35秒	1996.11.13 ~ 1996.11.14	35m ²	道路改良工事に伴う試掘調査
小影	山形県長井市上伊佐沢小影	6209	132	38度07分29秒	140度05分47秒	1996.11.18 ~ 1996.11.19	18m ²	大規模造成に伴う試掘調査
大屋敷	山形県長井市九野本字大屋敷	6209	新規	38度05分16秒	140度02分03秒	1996.12.11 ~ 1996.12.11		道路改良工事に伴う試掘調査
塔の上	山形県長井市いの森字塔の上	6209	53	38度02分28秒	140度03分52秒	1996.10.30 ~ 1996.10.31	35m ²	遺跡台帳整備に伴う試掘調査
河井山II	山形県長井市河井字西前・東前	6209	202	38度04分17秒	140度03分27秒	1996.11.21 ~ 1996.11.29		遺跡台帳整備に伴う試掘調査

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長者原	集落跡	縄文(中期)	土坑	縄文土器 剝片	
小影	散布地	縄文	土坑	縄文土器 石器 剝片	
大屋敷	館跡	中世	壇跡		
塔の上	散布地	縄文 中世	土坑 曲輪 帶曲輪	縄文土器 剝片 須恵器	
河井山II	集落跡	旧石器		石刀・剝片	

**長井市埋蔵文化財調査報告書第14集
市内遺跡発掘調査報告書(5)**

平成9年3月13日 印刷

平成9年3月31日 発行

発行 長井市教育委員会
山形県長井市ままたの上5番1号
TEL 0238(84)2111

印刷 ダイヤ印刷所
山形県長井市高野町一丁目6-20
